



東海道五十三次 一知られざる穴場— その⑫

日本武尊が伊吹山の神に打ち負かされて深手を負い、この坂を剣を杖としてようやく上り終え、血止めをした所。血塚社の名も杖衝坂の名もその故事に由来。『古事記』に「吾が足三重にまがりなしていたく疲れたり」とあるのが、三重の県名の語源。芭蕉の句もそれらの故事を意識しているが、「この坂を徒歩でなら杖もつけようが、なまじ馬に乗ったので落馬してしまった」という駄洒落句で、しかも季語なしの芭蕉にあるまじきほどの駄句。

この後1号線と合流した向こう側の歩道に、采女一里塚跡の碑。これで四日市宿では富田、三ツ谷、日永、采女の4つの何れも立派な一里塚跡の碑に出会えたことになる。



(歌川広重 石薬師宿)

采女一里塚を後にしてしばらく行くと、1号線と分かれてまた合流。ほどなく右に分かれて石薬師宿(44番目)に差しかかる。最初に目にするのは、「東海道石薬師宿」と石柱の中に黒地に白抜きで彫られた碑。次いで「ここから南 石薬師宿 信綱かるた道」と板書された標柱の上部に、①と番号入りで紹介されている佐々木信綱の歌板。宿内にはこの小モニュメントが東から西へ、28基整備されていた。少し進むと小澤本陣址の碑。宿場遺跡はこれだけ。ほどなく佐々木信綱生家と佐々木信綱資料館に到着。資料館前や宿内の其処此処に、卯の花が咲いていた。信綱作詞になる『夏は来ぬ』の歌詞、「卯の花の匂う垣根に・・・」にゆかりの花である。館内の展示で、『水師營の会見』の作詞も信綱の手になるものだと知った。「旅順開城約成りて敵の將軍ステッセル・・・」の歌詞で、我らの世代にはお馴染みの文部省唱歌。信綱の孫に当たるのが佐々木幸綱(俵万智の師)で、両人の故郷を詠んだ歌が仲良く1つの碑の中に納まって資料館前に建っていた。

佐々木家の先祖は、梶原景季との宇治川の先陣争いに勝利した佐々木高綱で、以後子孫は代々「綱」の字を受け継いで来た由。

信綱資料館を出て歩を進めると宿の名にもなった、日本三大薬師寺の一つ石薬師寺。東海道はこのお寺の前からなだらかな下り坂となり、川を渡ると石薬師一里塚の碑と、「ここから北 石薬師宿」があり、北から歩いてきた者にとってはこの宿の終点。



(歌川広重 庄野宿)

次の庄野宿(45番目)の最寄りの駅は、JR加佐登駅。東海道は駅の南側を通る。北側には加佐登神社と白鳥塚古墳。江戸時代、日本武尊の終焉の地で、白鳥となって大和へ飛び立った跡と信じられて来た遺跡。明治になって能褒野神社に取って代われ、こちらが宮内庁直轄地に。双方の距離はさほどでもないが、前者は鈴鹿市で、後者は亀山市。

遺跡は「東海道庄野宿」碑、庄野宿問屋場跡、鈴鹿市指定建造物旧小林家住居跡、庄野宿本陣跡、庄野宿高札場跡、庄野宿脇本陣跡、郷会所跡等の碑や説明板が建ち並ぶ。

庄野宿は水害の危険性の高い地であった。だから鈴鹿川、安楽川、芥川等の合流地に3つの川俣神社が祀られていた。最初の神社には県の天然記念物に指定されているスダジイの巨木が。その先

には大きな「女人堤防碑」も。鈴鹿川の氾濫を防ぐための築堤の願いを神戸藩が許さなかったため、女性たちが打ち首覚悟で6年がかりで、夜陰に紛れ築堤作業をやりおとした由。文政12年(1829)のこと。ほどなく2つ目の川俣神社と中富田一里塚跡があり、少し先に3つ目の川俣神社。その先の安楽川に架かる和泉橋を渡れば亀山市。

庄野宿を出てしばらく歩く。やがてJR関西本線の踏切りを渡り2差路を左折すると、井田川駅前になる。近くの海善寺前に、「亀山宿・江戸の道(旧東海道)」の案内図板。さらに1号線を2度渡って進むと、法悦供養塔が。日蓮宗信者谷口法悦が刑死者を供養する碑を、刑場跡に建立することを発願し、元禄8年(1685)から3年かけて、京~江戸千住の間に6基建立。三雲(水口)、関、亀山(川合)、江尻、鈴ヶ森(品川)の6ヶ所の中の1基。さらに進むと和田の道標、和田の一里塚があり、次いで能褒野神社(白鳥御陵)の一の鳥居。一の鳥居は東海道沿いにあるが、神社自体は北側の1号線を越えたさらに北側。



(歌川広重 亀山宿)

この後市内に入って亀山宿(46番目)。亀山宿江戸口門跡で始まり、東海道亀山宿樋口本陣跡、東海道亀山宿の碑、西町問屋場跡、亀山宿京口門

跡と城下町らしくじぐざぐに折れる道が続く。京口門を出た後、野村の一里塚。珍しい棕の木が植えられていて、国指定史跡。名阪高速高架下の壁面に三重県下7宿(桑名～坂下)の広重の図が並んで描かれていた。

亀山から大岡寺驛を通過して関西線を越え、1号線の歩道橋を渡って左に少し進むと、右斜め前方に入る細い道がある。入口に「東海道五十三次 関宿」の看板と、「関の小萬のもたれ松」の説明板がある。鈴鹿馬子唄の4番の歌詞に、「与作思えば照る日も曇る、関の小萬の涙雨」と詠われた当人。小萬はまだ赤ん坊の時に討たれた父親の敵討ちを、長じてこの地で果たした健気な娘さん。少し進むと鳥居が見えて来る。鳥居は伊勢神宮の一の鳥居。ここが関宿の東の追分。瓦屋根付きの説明板があるが、最近亀山市と合併したので整合性を図るため文字が剥されたり削られたりしていた。この追分から伊勢別街道が始まる。ちなみに西の追分からは大和街道が分岐していた。関宿(47番目)の入口はこれら東西の追分から始まり、追分で終わっている。



(歌川広重 関宿)

関宿は昭和59年に、「関町関宿重要伝統的建造物群保存地区」として東海道で唯一国の指定を受け、以後、町ぐるみで保存に取り組み、街道筋の電柱も電線も取り払われた。まるで江戸時代にタイムスリップしたような、ゆったりとした時間と空気が流れている稀有な街道となった。

街並みに残る主だった建物を列挙すると江戸屋、御馳走場跡、関まちなみ資料館、西尾脇本陣跡、問屋場跡、川北本陣跡、ふるさと茶屋、伊藤本陣跡、萩野脇本陣跡、旅籠「玉屋」歴史資料館、深川屋菓子舗、土蔵風の郵便局等々。その内、江戸屋には鉄の馬繋ぎの輪と塗籠の壁が残り、まちなみ資料館はもと置屋の建物を復元したもの。歴史資料館は元上旅籠玉屋の建物を復元したもの。郵便局は陣屋跡で、高札場が復元され幾つもの高札が陳列されている。深川屋菓子舗では、関宿の名物であった「関の戸」という名の饅頭を、今でも販売している、また問屋場跡の後ろの建物は山車の収納庫。山車をここでは「だし」と呼ばずに「やま」と呼んでいるが、狭い東海道の幅いっぱい、通れるぎりぎりの大きさに造られている所から、「これ以上出来ないという限度」を意味する「関の山」という語が生まれたとのこと。やがて道の左手に見えてくるのが地藏院。関の地藏さんの名で親しまれているお寺。鈴鹿馬子唄に、「関の地藏に振袖着せて、奈良の大仏婿にとる」と唄われたほどの美貌の持ち主とか。この後少しで西の追分。県指定の史跡になっていて、「鈴鹿馬子唄歌詞の図」板も建っていた。ここまでが関宿。